

ないといけない植物があると思ったら、他方では駆除すべき植物があり、行政サイドが翻弄された1年であった。話は変わるが、10月6日、県内の土木と農林関係の行政担当者を対象に、生態系の保全に関する研修会が行われた。筆者は植物について話をしてほしいということで講師を依頼された。会場には国（建設省）、県、市町村の担当者が予想をはるかに上回る280名かけつけた。佐賀

県のような小さな県でこれだけの人数が集まることは画期的である。以前はこの手の研修会を行っても、役目すませに各部署から1名ずつ来ればいい方であったが、今回は所長や部長クラスも多数参加し、現場がいかにかに困っているかを象徴する結果となった。今後、生き物や生態系に対する認識は行政サイドを中心に急速に高まって行くことが予想（期待）される。

○趙可夫・李法會（主編）『中国塩生植物』（科学出版社、1999年、382p., 65.00元）

塩生植物というと塩湿地やマングローブの植物を思い浮かべるが、本書では海草から塩分濃度の高い乾燥地の植物まで含め、水生（湿生、水生）塩生植物、中生塩生植物、乾生塩生植物の3グループを扱っている。前半の100ページあまりが塩生植物の形態、生理、生態、植生類型、有用性などを論じた総論、残りのページは、中国産の塩生植物400種あまりについて形態や分布に関する記載（多くの図を含む）と検索表がある。

ヒルムシロ科、トチカガミ科、アマモ科などの汽水性の水草や海草に関しても中国産の種類がひとつと取りあげられていて参考になる。

○中国湿地植被編纂委員会（編著）『中国湿地植被』（科学出版社、1999年8月、553p., 90.00元）

中国の湿地面積はアジアで一番の6300万 ha におよび、湿地のタイプも多様である。現在では湿地の保全が中国でも重要な課題になっているようだが、湿地研究センター（The Mire Research Center）で行われてきた湿地の植生に関する長年の研究を集大成したのが本書である。6部27章から構成される目次を見れば、本書の扱っている広範な内容を伺い知ることができる。狭義の湿原から淡水域、さらには海草の群落まで含まれている。第一部の「総論」に始まり「中国における湿地植生の主なタイプ」、「中国における湿地植生の地域区分」、「湿地の形成と遷移」、「湿地生態系」、「湿

地の合理的な利用と保護」と続く。「湿地の形成と遷移」の部では植物遺体や花粉分析などの研究に基づく歴史的な問題（植生史）が取り扱われており、このような内容を書物として取り上げたのは中国では初めてだという。

前書きと目次に英訳がつけられている以外は中国語だが、その気になればおよその内容の見当がつくのが中国の本の嬉しいところだ。また巻末には代表的な湿地タイプのカラー写真が14ページにわたって掲載されていて、印刷もきれいなので、中国のさまざまな湿地についてイメージを得ることもできる。

○『高知県植物版レッドリストについて』（高知県文化環境部環境保全課、1999年3月、58p.）

高知県版レッドデータブックの出版に先立ち、絶滅種45種、絶滅危惧種624種のリストが公表された。IUCNのカテゴリーに準拠して種の選定が行われている。絶滅種の中にはミゾハコベ、ノタヌキモ、マルバオモダカ、マルミスブタ、トチカガミが含まれていて驚く。リストされた種のアイウエオ順一覧表もあって親切に編集されている。

A4版の入る封筒に270円切手を貼って〒780-8570 高知市丸の内2-4-1 高知県文化環境部環境保全課 保全指導班レッドリスト担当宛に申し込めば送ってもらえるとのことであるが、残部があるかどうかは確認したほうがよさそうである。

（角野康郎）